

後期鉄器時代城塞とローマ時代ユダヤ人村落の調査 —イスラエル国テル・レヘシュ第二期調査(2013～2017)—

津本 英利 古代オリエント博物館研究員
 桑原 久男 天理大学文学部教授
 長谷川修一 立教大学文学部教授
 橋本 英将 天理大学文学部教授
 小野塚拓造 東京国立博物館主任研究員

The Late Iron Age Fortress and the Jewish Village in Roman Period: The Second Phase of Excavations at Tel Rekhes, Israel, 2013-2017

TSUMOTO, Hidetoshi Curator, The Ancient Orient Museum, Tokyo
 KUWABARA, Hisao Professor, Tenri University
 HASEGAWA, Shuichi Professor, Rikkyo University
 HASHIMOTO, Hidemasa Professor, Tenri University
 ONOZUKA, Takuzo Curator, Tokyo National Museum

津本
英利／
桑原
久男
ほか

1. 遺跡の立地と調査の概要

テル・レヘシュ(ヘブライ語名。アラビア語名テル・ムハルハシュ)は、イスラエル国北部の下ガリラヤ地方東部に位置する、面積約4.5 haの遺跡である(図1)。遺跡の麓に沿って、東側を除く三方を、タボル川、レヘシュ川が囲繞している。周囲は海拔36 mを測る遺跡の最高点よりも高い丘に囲まれており、周囲の眺望は必ずしも良好ではないが、西方に位置するタボル山(標高588 m)はよく見通せる。遺跡の立地は、ヨルダン溪谷からタボル山やナザレ(当遺跡の西17 km)、またイズレエル平野へと抜ける谷沿いに当たる。遺跡の面積は、青銅器から鉄器時代に限ればこの地域では最大級であり、当遺跡を後期青銅器時代のエジプト史料や旧約聖書『ヨシュア記』に登場する「アナハラト」に同定する見解もある。発掘調査開始前には当遺跡でエジプト語銘入彫像断片や土製の神殿模型などが地元住民により採集されており、近隣に所在するキブツ・エンドール内の博物館に展示されている。

2006年に開始された第1期調査(団長：月本昭男)では、2010年まで6シーズンにわたり遺跡の各地点で発掘を行い、各時代の居住の痕跡の把握に努めた。その結果、前期青銅器時代から初期ローマ時代(ヘレニズム時代は除く)におよぶ、約3000年間にわたるこの遺跡での居住史が明らかとなった(図2)。この第1

期調査については、現在報告書出版に向けて鋭意準備中である。

その後2013年より桑原久男を団長として、遺跡頂部にある約5000 m²の平坦面(通称「アクロポリス」)に広がっている後期鉄器時代および初期ローマ時代の遺構の性格を把握すべく、2017年まで5シーズンにわたり第2期調査が行われた。本発表ではこの第2期調査の成果と分析について報告する。その後は後期青銅器時代～鉄器時代への移行期の調査を主目的として、遺丘中位平坦面(通称「下の町」)における第3期調査を2019年に開始し、現在に至っている。

2. 遺跡頂部平坦面の地勢と遺構

テル・レヘシュは南北350 m、東西150 mの不整形な卵型を呈する遺跡丘であり、遺跡の中央より北寄りに遺跡最高地点(海拔36 m)があり、南に向かってなだらかに傾斜している(図3)。一方南側以外の三方向は比較的傾斜が大きい。

遺跡頂部の平坦面では2010年までの第1期調査中に、A地区(通称「城門地区」：平坦面の北東隅)、F地区(平坦面の南東隅)、およびG地区(平坦面中央部)で発掘が行われた(図1)。A地区では初期鉄器時代の城門らしき遺構が発見されているが、この発表で扱う鉄器時代の後期には既に埋没していた。平坦面の南東隅(F地区)および南西隅には、発掘以前より幅1 mを越える厚い壁が地表に露出しており、数地点で

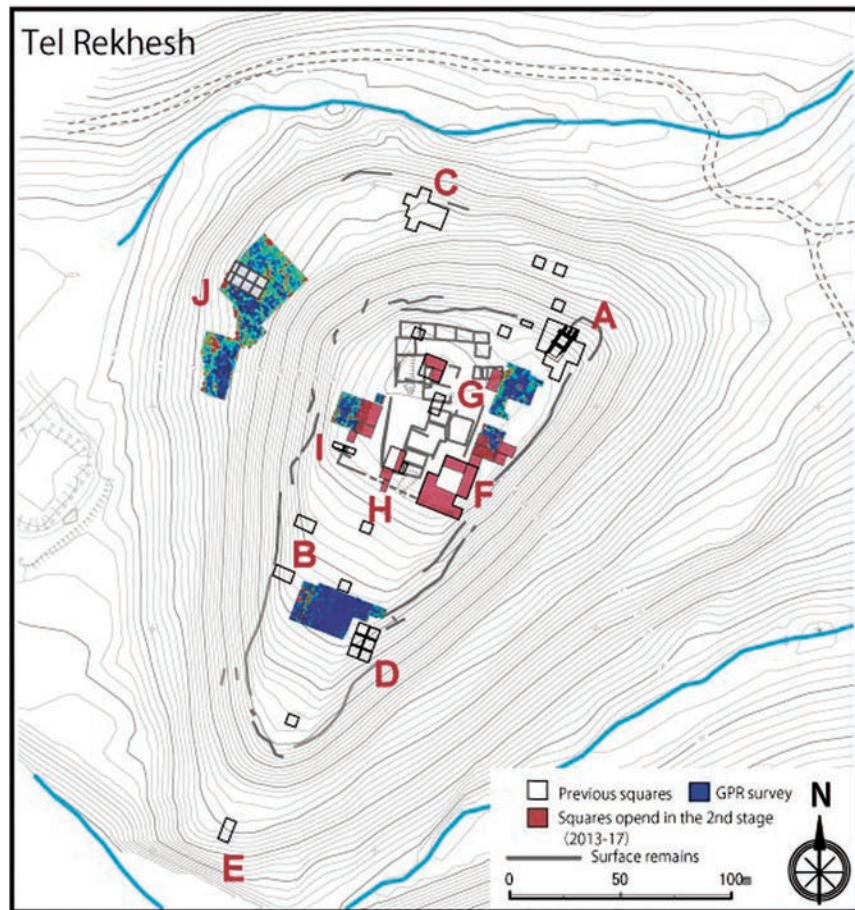
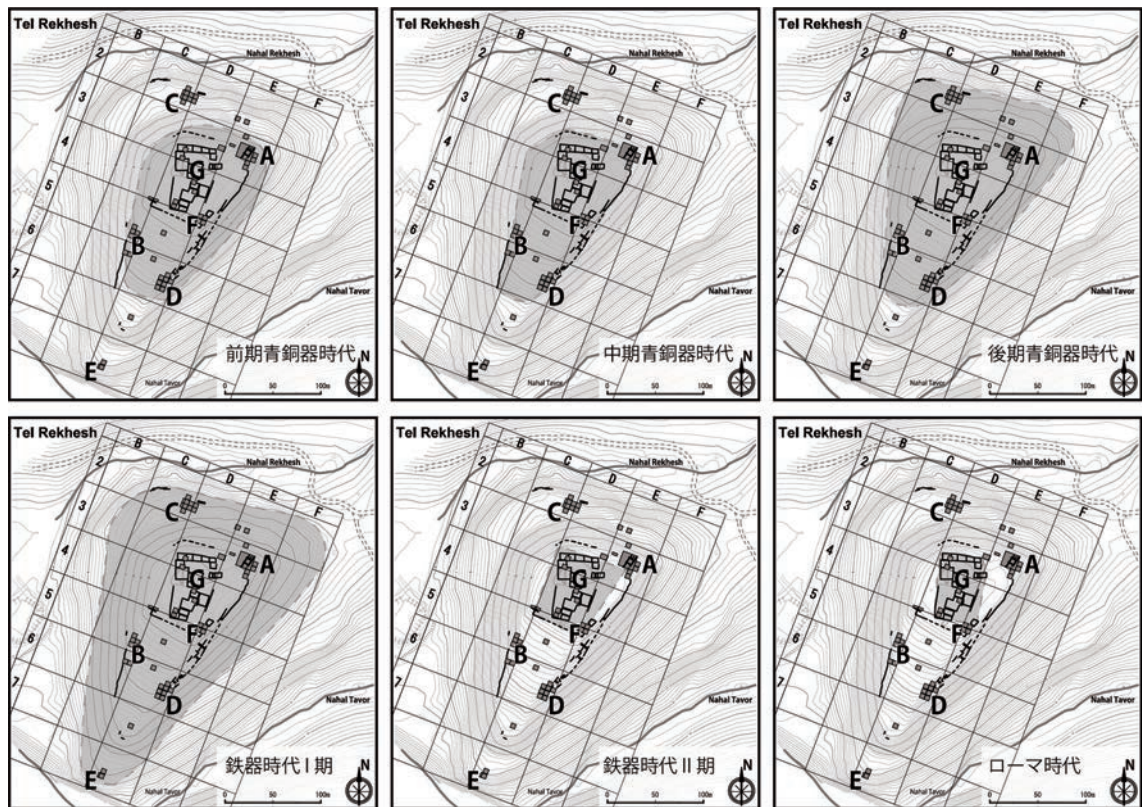


図1 テルの地形と第二期調査区配置図



時代ごとによる居住範囲の変遷（推定）

図2 各時代の居住域

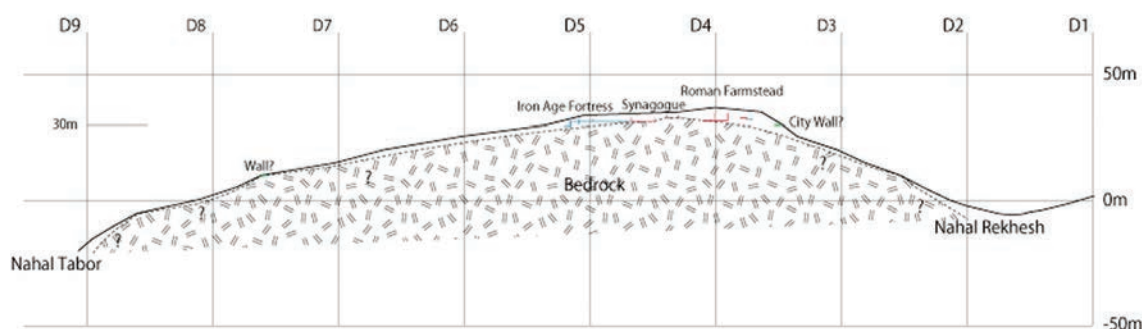


図3 レヘシュエレベーション図

の発掘により、平坦面の南半を覆うような形で、鉄器時代Ⅱ期の後期もしくはアケメネス朝ペルシア時代（ここでは「鉄器時代末期」と呼称）の大型建築物（「城塞」）が埋まっていることが判明した。この第1期調査では敷石を伴う入口部分が検出された。

また平坦面中央部（G地区）ではやはり地表面に石列や石組が露出しており、採集される土器からローマ時代もしくはビザンツ時代の遺構と推測されていた。数か所での発掘の結果、コインやランプ、フレスコ彩色壁画片などの出土遺物から、この遺構がローマ時代初期（1～2世紀）に属する「ファームハウス」（農場）の一部であるらしいことが判明した。またユダヤ人が穢れを避けるために使用したとされる石灰岩製容器片の出土から、この農場の主はユダヤ人であった可能性が考えられ、ユダヤ教徒の集会所であるシナゴグの発見が期待された。

なおローマ時代遺構の直下から岩盤（テル・レヘシュの核となった自然丘陵）が出土する箇所があり、頂部平坦面の北半に深い堆積はない。したがって鉄器時代とローマ時代の遺構はほとんど同じレベルに存在することが考えられる。ローマ時代の建設活動により、それ以前の遺構は破壊された可能性も考えられる。頂部平坦面北半はローマ時代遺構が崩壊した大量の石材が堆積して高まりとなったもので、鉄器時代にはこの平坦面は全面ほぼ同レベルであった可能性もある。

3. 後期鉄器時代城塞の発見

第2期調査では、第1期調査のF地区で検出された壁の続きを追う形で発掘区を拡張しつつ、平坦面南端に新たにH地区を設け、また地中レーダー探査の成果に基づいて、平坦面西側にも発掘区（I地区）を新設した。その結果、この大型建築物の南東隅と北東隅と思われる箇所が発見され、この建物は全体では東西55 m、南北35 mの規模であったと推測されている

（図4）。

この建物の南東隅には内面に厚くプラスターが塗布された一室（Room 974）が検出され、メソポタミア方面の新アッシリアや新バビロニア時代の建築にみられる「浴室」との共通性が見いだされる。また南端にあたるD5i2区では、平坦面の縁辺に位置するこの場所において、この大型建築物を造成するに際して大規模かつ入念な地均しや地固めが行われた痕跡が見出された。2015年の調査で発見された大型建築物の北東隅より北および東には壁の続きはなく、頂部平坦面のより外側からは後期青銅器時代の遺構が検出された。

南面に当たるH地区では、東西方向に並行する三列の壁が検出された。またこの壁の一つに付属して、プラスターを塗布した階段状の遺構が発見されており、壁の方向性などからは鉄器時代末期に建設されたものと考えるのが妥当である。しかし発掘で出土した土器片はローマ時代のものが多くを占めており、ローマ時代にも再利用された可能性を排除できない。理化学的年代測定によるプラスターの年代測定の結果を待ちたい。

この建物の西面では、地中探査の成果に基づき発掘を行ったところ、二重の壁が検出された。この壁は岩盤を掘り込んだ施設（ワインプレス？）の上に乗る形で建設されていた。この施設内には鉄器時代ⅡB期の土器多数が投げ込まれていた。またこの西面壁は、さらに北側の地点において後述する初期ローマ時代のシナゴグとはほぼ同レベルで接続していることから、シナゴグ建設時にこの大型建築物の北西隅は破壊されたものと考えられる（図5）。

悩ましいのがこの大型建築物の具体的な年代と性格である。土器は概ね鉄器時代ⅡC期（アッシリア支配期以降）の年代を示すが、ペルシア時代の土器に類似するものが出土しており、新バビロニア～ペルシア帝国時代にこの施設が使われていたことを推測させる。

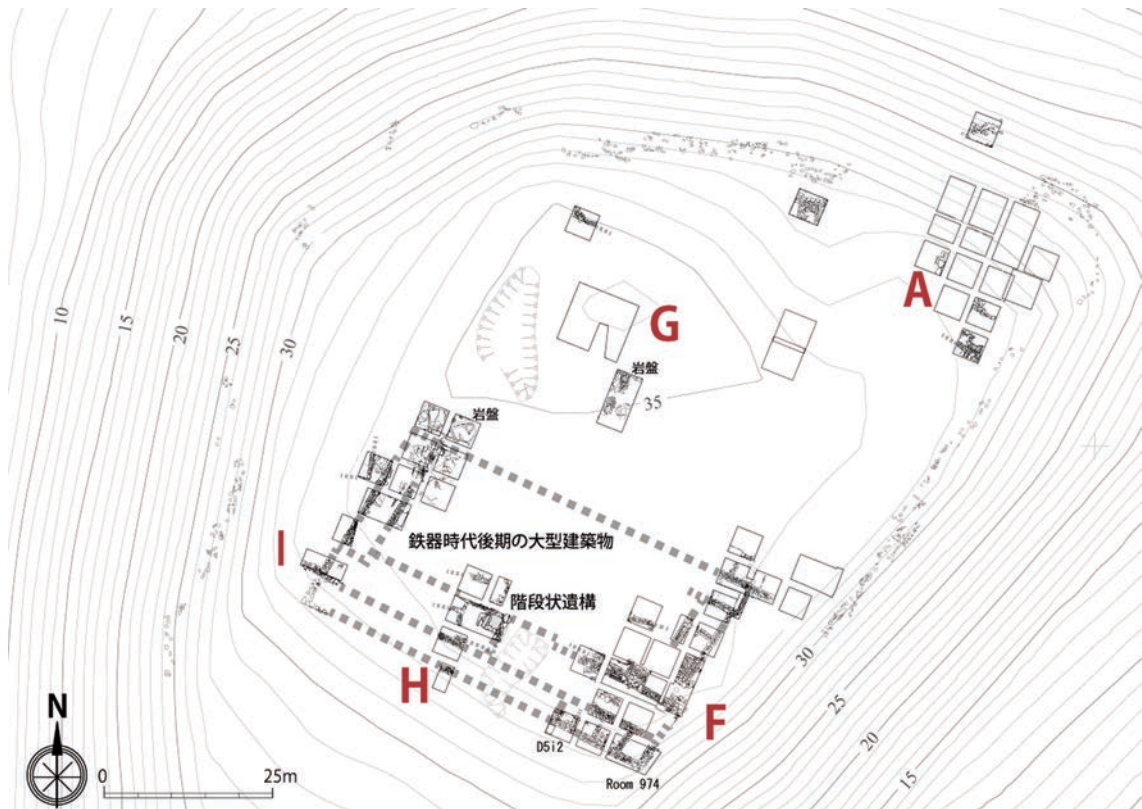


図4 頂部平坦面の後期鉄器時代の遺構



図5 鉄器時代遺構とローマ時代のシナゴグが切り合っている箇所

「楔装飾鉢 wedge-decorated bowls」片や、発掘開始前に採集された「アッシリアン・ボウル」(エンドール博物館蔵)、そしてG地区から発見された、楕円形を呈するスキタイ式三翼鍬は、新バビロニア時代(前6世紀前半)への年代的帰属を示している。一方、第1期調査時に遺跡中腹のB地区から出土した銅製フィブラ(留金)は、類例から新アッシリア時代(前7世紀)のものとみられ、平坦面各所で鉄器時代ⅡB期の土器の出土も見受けられる。一方、大型建築物北西隅にあたる箇所で発見された、全体が菱形を呈する三翼銅鍬はペルシア時代(前6世紀後半以降)に典型的なものであり、新バビロニア時代を主としつつも、頂部平坦面での鉄器時代における活動の年代幅を考えざるを得ない。

この建物の性格についてであるが、上記の通り周囲の見晴らしがよくないことから、監視所あるいは外来支配者(アッシリア、バビロニア、ペルシア)の威光を示す建物とは考えにくい。平坦面南半という立地は、どちらかといえば南側の丘の上からこの遺跡への眺めを意識したものと考えられ、イスラエル北部を東西方向に走る間道を扼するための、実用的な軍事的駐屯地あるいは交通・通信の中継拠点としての役割を考えたい。



図6 頂部平坦面のローマ時代遺構

4. ローマ時代前期のユダヤ人農場とシナゴーク

上記の通り、第1期調査の末期、頂部平坦面北半に広がるローマ時代前期の遺構が注目されたため、当地域のローマ時代の考古学を専門とする M・アヴィアム氏に調査に加わってもらい、第2期調査を行った。

このローマ時代の農場跡は、Building A を中心として、納屋や居室と思われる遺構が連なっている(図5)。特に、部分的に2m以上の高さの壁が残存する Building A は、二階に上るための階段や、いわゆるウィンドウ・ウォールを備え、フレスコ彩色壁画片やストゥッコ片なども出土する、主屋的な建物であったと推測される。「ナイフ削りランプ」(knife-pared type lamp: 「ヘロディアン・ランプ」とも)および型押し製作による「ダロム・ランプ」という二種のランプ、そしてティベリアやテュロスで発行されたコインの年代などから、この農場跡の年代は第二次ユダヤ戦争(紀元後135年)頃までの約1世紀あまりと推定される。

第2期調査の成果として特に注目されるのは、2016年と2017年の調査の際、頂部平坦面の西端において鉄器時代末期の遺構を発掘する過程で発見された、集会所(シナゴーク)と考えられる遺構である。エルサレ

ム第二神殿の破壊(西暦70年)より前に建てられた初期シナゴークであり、類例の少ない貴重な発見である。この遺構はローマ時代の農場の西のはずれに位置しており、8.5×9.3mを測る。壁の内側に沿って石製のベンチが囲繞しており、入口は北側の一か所である。岩盤上に建設されており、床面中央に二つある柱礎のうち一つは、岩盤を削り出して作られている。アヴィアム氏はこのシナゴークを、農場主により建設された「私的(private) シナゴーク」の一例ではないかとみている。このシナゴークの発見は、ユダヤ教や原始キリスト教の歴史を研究するうえでも極めて有意義な発見となった。

第2期調査の成果報告については、第1期調査の報告書刊行に続けるべく準備中である。また2019年に行った頂部南半の地表面に露出する遺構の追加調査で、ローマ時代の農場とは軸線が異なる大型遺構を発見しており、ローマ時代層の年代や性格を考えるうえで今後の課題となっている。

■参考文献

- ・桑原久男・山野貴彦・津本英利 2018「ガリラヤの最初期シナゴークを掘る—イスラエル国テル・レヘシュ第11次発掘調査(2017年)—」『第25回西アジア発掘報告会報告集』49-52頁 日本西アジア考古学会。

- ・橋本英将・小野塚拓造・桑原久男 2021「イスラエル国、テル・レヘシュの「下の町」—第12次調査(2019年)を中心に—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』36-40頁 日本西アジア考古学会。
- ・Aviam, M., S. Hasegawa, H. Kuwabara and Y. Paz 2019 A 1st-2nd century CE assembly room (Synagogue?) in a Jewish estate at Tel Rekhes, Lower Galilee. *Tel Aviv* 46: 128-142.
- ・Hasegawa, S. H. Hashimoto, H. Tsumoto and T. Onozuka 2020 The excavations at Tel Rekhes, Israel: the results of 2013-2017 seasons. In A. Otto et al. (eds.), *Proceedings of the 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 2*, 115-128. Wiesbaden, Harrassowitz.
- ・Hasegawa, S. 2020 The southern Levant in the shadow of imperial powers: Tel Rekhes in the Late Iron Age. In S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries (Studia Chaburensia, 8)*, 25-43. Wiesbaden, Harrassowitz.